

ブルー・ジーンズのボロ化の社会心理

小見山二郎・宮崎由伊・中野麻子

生活環境学科 生活環境管理研究室

Social Psychology of the Emergence of Ragged,
Bleached or Patched Blue Jeans in Japan

Jiro KOMIYAMA, Yui MIYAZAKI and Asako NAKANO
Department of Human Environmental Sciences

Recently in Japan, ragged, bleached or patched blue jeans are being in fashion. Reasons for this trend are discussed in terms of the social psychology: namely, indivisualization, American-culturization and return-to-nature-ism, in the order of importance.

Key words : jeans (ジーンズ), rag (ボロ), sociology (社会学), indivisualization (個人化), American culture (アメリカ文化), nature (自然), pre-modern (前近代)

1. 始めに

ここ数年、ブルー・ジーンズ（以下ジーンズ）の変化が著しい。従来のデザイナーズ・ジーンズや素材布の改良をうまくデザインに取り込んだ美脚ジーンズ、の他に、‘すだれ状の破れ（経糸は除くが緯糸は残した破れ）’ ‘まだらのブリーチング（漂白）’ ‘つぎはぎ（同種または異種の布によるデザイン的なつぎあて）とペンキ汚れ’などの加工が加えられたジーンズが若者の衣服として目に付くようになった。これまでの数千年間、人々は新しい状態から衣服を着て古くなると捨て去ってきたが、このような近代までの生活慣習に反し、それゆえ反価値的な使い古し感を持つジーンズが、流行している。これをジーンズのボロ化と呼ぶことにする。単一のアイテムの流行ではあるが、この現象は、手工業が起って以来の衣服の近代を、いわば前近代に突きぬけた記号性を持っている。このようなトレンドが今後定着し、さらに拡がるかどうかは、それがジーンズ以外の衣服に広がるかどうかにかかるところが大きいだろう。いずれにせよこの変化の背景に、大きな社会心理的状況の変化がなければ起こらない事柄であると思われる。

関連する最近の論説として、'05年10月のIFFTIの講演(1)、小川安朗の服飾変遷の原則(2)、M-A、デカンの流行の社会心理学(3)を挙げておく¹⁾。(1)は21

世紀に入っの衣服の変化の動向、(2)は有史以来の衣服の変化を抽象的な法則にまとめたもの、(3)は1970年代までのフランスの衣服の変化を社会心理的に取り扱ったもので、ジーンズ・Tシャツ文化についても論じている。現在起っているジーンズの変化は人々の心の中に、整合的で画一的な衣服の拒否と自然への回帰、が芽生えていることの表れであると考えられることは、多くの人が納得するだろう。

このような‘ボロ化現象’に視点を当てて、第二次世界大戦後現在に至るまで、ジーンズが息長く日本で流行してきた後、現状の変化が起こっている理由を探りたいというのが本稿の目的である。衣服の流行や文化史を論じた成書は沢山あるが、ジーンズの社会心理を論じた論文は極めて少ない^{2,3,4,5)}。試みにその幾つかを精読したが、ジーンズのボロ化現象を理解するのに役立つ知識を得ることは出来なかった⁶⁾。本稿では広い意味での社会学的視点に立って、理解を進めることを試みる。

これまで、衣服を取り扱った歴史書では、他の歴史的的事象とは比較的關係が少ない文化史として記述がなされてきた。これらの文化史では、ほとんどの場合各時代の高い階層の衣服を対象とし、庶民の衣服が対象となることは極めて稀であった。柳田國男の「木綿以前のこと」⁷⁾および「明治大正史 世相篇」⁸⁾中の、衣

服についての記述は例外的なものであろう。さらに遡ると、江戸時代末までの比較的低い階層の衣服については、ごく断片的にしか知ることができない²⁸⁾。素材は綿で、多くは破れやつぎのあたたかものであった。綿、麻でないことすらあった^{9,10,11,12,13,14)}。開国とほとんど同時に起った紡績産業の発展と共に、人々の衣服の質は飛躍的に向上したが、1950年頃でも農民は日本の人口の約50%を占めており、日常着はもちろん、外出着でも洋服よりは着物が多かった¹⁵⁾。この前後の困難な時代を経た後、外国からの流行の波及や低価格の衣服の普及などがあって、現在の高級品と低価格品の衣服の二極化の時代に至っている。このような中で、つい10年前まで、古着は衣服としての価値をもたないと考えられていた¹⁶⁾。しかし実はボロは繊維製品市場の中ではある役割を果たしてきた¹⁷⁾。

それとは別に最近のジーンズのボロ化による表現には従来の‘新しく清潔な衣服’の表現とは極めて異質なものがあつた。冒頭に述べたような‘反価値的’なジーンズにはどういう意味があるのだろうか。

2. 観察と論理

2004年10—12月、日野駅、立川駅、新宿駅南口、銀座四丁目、渋谷駅ハチ公前、巢鴨駅、横浜駅付近で約3500人のジーンズの着用状態を観察した。本稿ではこの結果の数量的な取り扱いをせず、通常のジーンズでない特殊な縫製や加工が施されているものに着目する。これらを類別すると、図1～3に示すように1. 緯糸がすだれ状に残った破れや、カットオフ状の切り口、2. 模様ともなっている部分的なブリーチング、3. 不整なデザイン性を持つつぎはぎとペンキ汚れ、に分類できる。1～3のそれぞれには、社会学的にも論ずべき拡がりもあるが、ここでは立入らない。いずれも従来の均一な布地を使った、清潔で整った構成の衣服に対し、‘反価値的’であるといえよう。このような衣服を、着用者がどのように評価して着用しているのかがまず問題になろう。しかし、着用者の心理という面のみをいかに精しく調べても、事柄の本質は捉えられそうにない。主観的な心理は服装の‘今’を色濃く反映するが、どうしてそのような選択がなされるようになったかということについてはほとんど何も語らないからである。一方ではジーンズの歴史的な理解とその意味付けを考え、他方では日本の社会と社会心

理の現状と、ジーンズのボロ化との相関を考えることにより、事柄を理解することが出来るのではないかと。本稿では、後者に力点を置いて、概念的に扱った日本の社会（心理）状況と、ジーンズのボロ化現象との関係を出るだけ‘納得できるように’結ぶことを心がけた。このような視点からの論究は未見である。この方法は、問題を全体的および時間的に把握するのには適していると考えて、この試論を提出する。

3. 考察—現在の日本社会の中でのジーンズのボロ化

主観的選好 ジーンズを着用している学生は何割というほどいる。その人たちからどのようなジーンズを好むかを対話形式で聴取し、以下のように類別した。1. かっこいい、2. 自分らしい、3. ヴィンテージ、4. 他の衣服と合わせやすい5. 丈夫で扱いやすい。1には、ジーンズに対する社会的にポジティブな評価が、現在拡大していると感じて、同調する気分を多く含む。2は十分認知できる個性性に価値を置く考え方である。これを個人化または個性化と呼んでもよいが、筆者は前者の意味合いが強いと考えている。3は全く新しいものでなく、古くからあると感じることで得られる心理的な落ち着きを表している。この線上に前近代への突き抜けがある。4は組み合わせにおける着用者の楽しみが極めて多様であることを示し、5はしわ、汚れを気にすることなく、日常着であると同時に外出着として身に付けることが出来るので、気楽であることを示す。これはジーンズが労働着に始原を持つ事によっている。

個人の主観と社会心理の乖離 しかしこれらの主観的価値の表明には、もっと漠然とした日本社会の人々が、あるいはジーンズを着用する階層の人々が、意識することなく持っている価値観が直接には反映されていないように思われる。例えて言えば世界の諸国の中の日本という視点から見た時に初めて扱えられる日本社会の特徴、他国の人が自国の文化と比較して感じる、日本人の考え方の特徴のようなもので、一つの現象の内側からの理解では扱えきれないものがあることは明白である²⁸⁾。特に本稿に関係する第二次世界大戦後の日本に即した例としては、戦後の日本の再生の原動力を、勤勉な庶民の努力とするダワーの視点や¹⁸⁾、歴史と個人のつながりを強く意識した中村政則



図1. ジーンズのすだれ状の破れ。緯糸が残っていることが多い。



図2. ブリーチングの模様のももある。

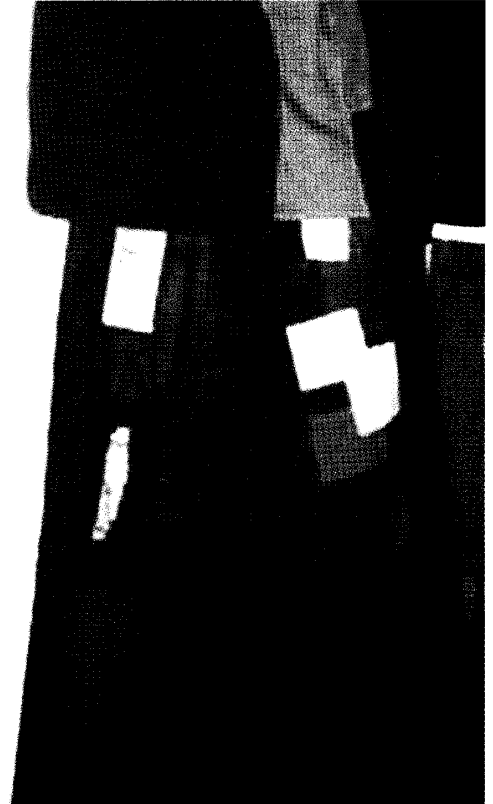


図3. つぎはぎ。ジーンズとは異質の布との組み合わせやパターンに工夫がある。



図4. 老人もジーンズをはく。巣鴨で。

の戦後史¹⁹⁾の中の個人の主観的表白などにも、社会の変化と個人の主観との乖離を見出すことが出来る。

ジーンズの略史とアメリカの影響 ジーンズは、戦後に日本に徐々に浸透してきた。子供用のオーバーオールは、1912年にリーヴァイスストラウス社から発売されているが、日本では1950年ごろに武田国男が子供服として着用していたことを述べている²⁰⁾。日

本におけるジーンズの歴史の中で特筆すべき事件として、1968年頃の学園紛争の際に学生に広く愛用されたという現象がある。このことには前述の主観の1、2、5が関係していると考えてよい。1の、当時の学生がかっこいいと感じた気分の中には、既成社会への反抗や性差の縮小に向おうとする社会の動きなどが、ジーンズを着ることに反映されていた。

1860年代から労働着としてアメリカに広まったジーンズは、アメリカの労働の記号性を未だに強く示していることは誰も異論はなかろう。現在のボロ化に至るような、ブリーチングや洗いざらしに対するポジティブな評価も、この歴史的経緯を土台として生まれたものである。具体的な事実は、たとえばリーヴァイス社から出版された「This is a pair of Levi's Jeans」に見ることが出来る²¹⁾。疑いもなく、この「アメリカ文化」の影響²²⁾、すなわち戦後になって初めてアメリカの強い影響を受けるようになった日本社会の諸相が、個人の選好につながる最大の因子であろう^{23,24,25)}。しかし後述するように最強ではない。日本社会は、生活という面から見てもこれまで他国に影響を及ぼすよりは、中国、欧州諸国に続いて戦後のアメリカ文化の影響を、歴史的事情に応じて強く受けてきた。このことがすなわち日本人の個性であると言ってよいかもしれない。

自由の拡大と性差の解消 自由を生活上の問題として捉えれば、例えば戦後の家電製品の普及が女性の家事労働からの開放に果たした役割は、誰も否定できないだろう。この60年間、日本社会は個人の自由に向って緩慢な歩みを続けている。前述の、社会の既成の体制に対する反抗のシンボルであったジーンズの意味の他にも、ジーンズにおける日常着／外出着の統合による自由、および性差の解消といったことは、上からの衣服の流行が絶えず差異を再生するのに対し、労働着であったジーンズのみが持ち得る記号であると言っても良い。このことは、例えば20世紀初頭にハインが撮影したように、ジーンズが少年少女の差異のない労働着であったことに始まる²⁶⁾。労働着であるが故のユニセックス化が、後年の性差の解消の進展に自然に組み入れられたということが出来る。

自然への回帰 この二十年間、人々の地球環境に対する認識は格段に深まった。これと共に地球環境の悪化に対する対応も、現在、人類の努力の最も大きな方

向付けとなっており、これとの深い関連の下で、生活の諸相を自然に戻す動きも少しずつ大きくなってきている。1980年代頃までの自然に対する人工の優越についての共通認識は、ここ10年程は全く逆転している。ジーンズは工業生産初期のイメージを持つ綿布を、植物染料の主成分でもある合成インジゴで染めたものなので、大量生産されるものの中でも、最も前近代的な香りが残っていて自然にも近い、と感じられる要素を色濃く持っている。

もともとジーンズはそれを身に付けた人々が、広大な自然と対峙するアメリカ文化の原型とも言うべき圧倒的なイメージを伴っている²²⁾。このイメージが、大きな流れとしての社会の自然への回帰と強く協奏していることは云うまでもない。

活動性 ジーンズが活動的なイメージを持つことは誰もが認める。しかしその活動性は、今のところ‘既存の組織の外’的な活動性である。例えば以前は‘老人’に組み入れられて、組織外活動ですらも無縁であった人達の、様々な活動性が増す近年の傾向に伴って、高齢者のジーンズの着用は増えてきている。図4に一例を示した。特に団塊の世代が60歳になる数年後からは、ジーンズの変化に新しい要素が付け加わる可能性が予感される。

ジーンズのボロ化の主因—個人化 上述のように、ジーンズに対する人々の意識に反映されていると思われる、日本の社会心理的な変動を指摘してきた。しかしこれらのみでは冒頭に述べた‘ボロ化’の‘主因’の説明としては不十分である。一つの事象が起こるためのあれこれの理由には、主導的なもの、協奏的なもの、補助的なもの、結果として生ずることの効果などがあるのではないか。私達は上に挙げた変動のうちで、ボロ化を導いた主因は、‘衣服の個人化(自由化)’であると考えている。個々のボロ化の様相が、個別的ないし個性的であることは疑い得ない。一方長い人類の歴史を見ても、これまでの衣服の個別化は、主として形、模様や柄によってなされ、材質はむしろ‘どこかに同じものがありそうな’共通性をもっていた。これは近代の機械生産とその下での流行の宿命でもあった。それと比べると、最近のジーンズのボロ化では個別化が際立っている。個々のボロ化は手工的に行われているので、手作業感もその記号性として十分強いものがある。しかしそれが、何故ボロ化による前近代的な反価

なかった。衣服においてもそうであった。戦後の世界におけるアメリカのプレゼンスは、紆余曲折を経る中で、質を変えながら拡大しており、現在も経済の一極化を強めながら進行している。これに伴ってアメリカの文化力も基本的には衰えないわけで、その一端に位置するアメリカンヴィンテージとしての、ジーンズのボロ化に対する評価も減ずることはない。

これとは別に長期的に人々の意識を変えてゆくものとして環境意識の定着と進化による「自然回帰」がある。これは時には近代を全否定することもあるようなモメントを含み、これからも後戻りすることはない。

このようなアメリカの文化力の影響と自然回帰の意識は、お互いに影響を及ぼしながら、人々の衣服に対する意識を同じ方向に変えてゆくことは、容易に認めることが出来る²⁷⁾。この二つの前提が崩れない限り、ジーンズのボロ化に対する肯定的な評価は変わらない。そのイメージは、これからの衣服の変化のプロトタイプとして生き続けることになる。また、ボロ化の主因である衣服の個別化は、手工の限りを尽くした上での現代の衣服の生産／消費の構造に対して、生活者／消費者である個人の意識をより強く反映する構造に変わることを強いる。例えば、衣服を製造する幾つかの段階の途中で、手工的处理を組み入れる形への変化を考えることが出来るだろう。

このように見てくると、冒頭に具体的なボロ化として挙げた「破れ」、「脱色」、「つぎはぎ」などは、かなり長い年数の間に現在ある色々な衣服にも、組み入れられるところから組み入れられてゆく過程をたどるものと思われる。これには、美意識と技術の上での制約が伴うが、個人的な考えでは、つぎはぎがもっとも容易で、脱色あるいは、デザイン的なむら染めがこれに次ぎ、破れはもっとも難しいのではないだろうか。

本研究は第 57 回家政学会年次大会（福岡）（2005. 4）で発表した。

謝辞 文献検索に関し、実践女子大学図書館、土居道子氏に感謝する。

【参考文献】

1) 最近の衣服に対する社会学的な考察として、以下の例

があげられる。

- (1) The 7th Annual IFFTI International Conference (2005): Tokyo (Bunka Women's University, October, 31st - November 5th)で報告された、Sass Brown, Growing Green Fashion Business, Abstract, p.9. (持続可能性と倫理観のある手法を取り入れたデザイン)、Denise Sprynskyj, The Rise of Customisation and the Globalism of Fashion, *ibid*, p.16. (手づくり、古着ファッションの手工的個別化)、Wing-sun Liu, Shopping-Some Post-modern Reflexions in a Global Context, *ibid*, p.31. (現代は記号的消費の時代で、消費者は市場における象徴を積極的に生み出すものである)などの講演は、最近の被服消費の動向を示すものとして、直接にはないが本論文のテーマと関係する。
- (2) 小川安朗：服飾変遷の原則、文化出版、東京（1981）
- (3) M-A・デカン（杉山光信、杉山恵美子訳）：流行の社会心理学、岩波書店、東京（1982）
- 2) 能澤慧子：二十世紀モード 肉体の開放と表出、講談社、東京（1994）
- 3) 鷺田清一：人はなぜ服を着るのか、NHK 出版、東京（1998）
- 4) 北山晴一：おしゃれの社会史、放送大学教育振興会、東京（2000）
- 5) 高岡朋子：パンツ／ジーンズの社会心理、家庭科教育、73(6)、pp.62~68（1999）
- 6) 出石尚三：完本ジーンズ、新潮社、東京（1999）
- 7) 柳田國男：木綿以前の事、p.59、創元社、大阪（1939）
- 8) 明治大正史：世相編（上）、p.15、講談社学術文庫、東京（1976）
- 9) 山脇悌二郎：絹と木綿の歴史、お茶の水書房、東京（1989）
- 10) 吉田豊編著：江戸服飾史談 大槻如電講義録、芙蓉書房出版、東京（2001）
- 11) 勝小吉：夢酔獨言、上（勝部真長注）東洋文庫 138、p.22、平凡社、東京（1969）
- 12) 石黒忠恵：懐旧九十年、p.55、岩波文庫、東京（1983）
- 13) 永原慶二：苧麻・絹・木綿の社会史、吉川弘文館、東京（2004）
- 14) 角山幸洋：改訂増補版日本染織発達史、田畑書店、東京（1963）
- 15) 三根尾久大：記録写真終戦直後、上、下、光文社カッパブックス、東京（1974）
- 16) 四方章夫：方法としての衣、p.172、青弓社、東京（1990）
- 17) 中野静夫・聡恭：ポロの話、リサイクル文化社、東京（1987）
- 18) ジョン・ダワー（三浦陽一、田代泰子、高杉忠明訳）：敗北を抱きしめて—第 2 次世界大戦後の日本人、上下、岩波書店、東京（2005）
- 19) 中村正則：戦後史、岩波新書、東京（2005）
- 20) 武田國男：落ちこぼれタケダを変える—私の履歴書一、日本経済新聞社、東京（2005）

- 21) L.Downey, J.Lynch and K.Mcdonough: This is a Pair of Levi's Jeans, Levi's Strauss & Co. Publishing, San Francisco (1995)
- 22) ヨセフ・S・ナイ: ジーンズはアメリカのソフトパワーである、日本経済新聞、2005、1、31 朝刊
- 23) NHK 放送世論研究所編: 図説戦後世論史第二版、(NHK ブックス 408)、p.176、日本放送出版協会 (1982) また NHK 放送文化研究所からは、「現代日本人の意識構造〔第六版〕(2005) まで、5 年おきの日本人の意識調査結果が、NHK ブックスとして出版されている。そこでは、特にアメリカの直接の影響を調べてはいないが、日本人の様々な生活意識の変化の中に、アメリカの影響を読み取ることが出来る。
- 24) 山本明: 戦後風俗史、p.99、大阪書籍、大阪 (1988)
- 25) エドウィン・O・ライシャワー、(福島正光訳): ザ・ジャパニーズ・トゥデイ、文芸春秋、東京 (1990)
- 26) ラッセル・フリードマン著 (千葉茂樹訳): ちいさな労働者 写真家ルイス・ハインの目にとらえた子供たち、あすなろ書房、東京 (1996)
- 27) 日経新聞: 2005、10、15 s11 ページ、つぎはぎ
- 28) 校正時の注記、渡辺京二: 逝きし世の面影、平凡社ライブラリー 552、東京 (2005) に、幕末から明治にかけて外国人が見た、当時の庶民の衣服の描画と記述が多数ある。